

「映画を創ってみよう!!」実施報告

「想いをカタチに」

- 1 趣 旨： 子どもたちが映画創りを通して、自分の思いを伝える力や相手の立場に立ち考える力などのコミュニケーション能力を養うことを目的とする。また、創った映画をアジア国際子ども映画祭に出品することを通して、子どもの文化芸術体験活動の普及啓発を図る。
- 2 日 時： 令和元年7月13日(土)～15日(月・祝)
- 3 場 所： 国立淡路青少年交流の家
- 4 対 象： 小学4年生～高校3年生 6組(1組5名前後で申込)
- 5 参加者： 7組33名(小学生 男子10名、女子17名)
(中学生 男子 0名、女子 5名)
(高校生 男子 0名、女子 1名)
- 6 講 師： 藤岡 文博 氏(兵庫県立加古川南高等学校)
馬田 めぐみ 氏(有限会社パートナーズ・プロ)
- 7 ボランティア
鈴木 崇士 (吉備国際大学)
仁尾 篤哉 (吉備国際大学)
伊吹 史也 (淡路島牛乳株式会社)
古東 直樹 (兵庫県立洲本実業高等学校)
竹谷 壮太 (兵庫県立洲本実業高等学校)
橋本 陽菜 (徳島県立城北高等学校)
松本 心結 (徳島県立川島高等学校)



8 プログラムの内容

1日目 ～シナリオ創り～

今年も3分間のショートムービー創りに仲間と挑戦する3日間がやってきた。6組の募集に対して7組の応募があった今年度。近畿からは兵庫県・大阪府・京都府、四国からは徳島県の参加者33名が集まった。小・中・高と参加者の年齢層も広く、どんな作品が完成するのか楽しみだった。



今年のアジア国際子ども映画祭のテーマは「迷惑をかけることは?～自分だけが良ければいいか。人のことも考えてあげられるか?～」。事前に参加者にはシナリオ作成に向け、あらすじや配役、撮影場所などをグループで話し合ってもらっていた。「迷惑」という道徳的なテーマを、グループごとにイメージとして書き出すことで、撮影に使う道具や服装まで準備できているグループもあった。

シナリオ創りは、講師の先生に「迷惑」について問いかげられるところから始まった。人によって同じことでも迷惑に感じるかの基準が異なることや、かけてもよい迷惑もあるかもしれないという話があった。テーマについて考え直すことで、大きくストーリーが変わったグループもあった。また、翌日の撮影日が雨の予報となっていた。映画には、雨を効果的に使うことで、印象的なシーンを創り出している作品があるという話を聞き、ストーリーに雨のシーンを追加するグループもあった。次に、出来上がったストーリーを場面分けし、台詞を考えていく。役の気持ちになって書いた台詞を読んでみると、どこか不自然だ。書いては読んでを繰り返し、納得いくものを創りあげていく。最後にカット割りを考え、カメラアングルを絵コンテに起こしていった。講師の先生からは「アングルを変えたり一部分をアップにしたりすることで、感情や情景を表現することができる。そこが工夫のしどころ。」という話があった。子どもたちは想像力を膨らまし、1つ1つのカットにグループの個性が出てきた。

表現したいことを台本にまとめていくため、1日中話し合いが続いた。自分のイメージを伝え、友だちのアイデアに耳を傾ける。よいものを創ろうと思うからこそ、意見がぶつかりケンカになる場面もあった。それでも、1日目の終わりには、全てのグループの台本が完成し、撮影に使う小道具や、シーンに合わせたロケ地が決まった。イメージが共有されたことで、翌日の撮影に向け、グループの想いが1つになっていくのを感じた。

2日目 ～撮影・編集～

予報通り、朝から大粒の雨が降っていた。それでも、集合時刻より早く集まり、台本や小道具の最終確認を行っている姿から、参加者の想いの強さを感じた。講師の先生と発声練習や体操を行いながら、更に気持ちが高まっていく。演技のポイントを教わり、撮影方法の復習をしたら、いよいよ各グループロケ地へ出発。雨が上がるのを待ちながら、屋内の思い思いの場所で撮影が始まった。「3・2・1、スタート！」の合図から「カット！」までの1カット撮っては、みんなでカメラを囲んでのぞき込んで映像を確認する。納得する1カットを撮るためには、



20回以上撮り直すことも珍しくない。雨のシーンをクライマックスにしたグループは、テイクを重ねた結果全身びしょ濡れになったが、満足いく仕上がりにハイタッチを交わしていた。昼からは雨が止む時間帯があり、各グループ屋外での撮影を慌たしく行っていた。カットによっては役者の人数が足りなくなる場合もあり、他のグループにエキストラを頼むなど、助け合って撮影を進めていた。疲れや時間と戦いながら、どのグループも夕方までに納得いく映像を撮影することができた。

夜からは編集作業を行った。何度も撮り直したカットの中から、納得いくカットを探し出し、編集ソフトを使ってつなげていく。つなげたものを見てみると5分前後…完成の3分間には程遠い。ここからは、ストーリーから必要ない部分をそぎ落としていくのだが、思い入れのあるカットのどこを削るのか悩ましい。講師の先生から「グループの伝えたい事をもう一度確認しよう。」という投げかけがあり、グループでの話し合いが続く。撮影の疲れは勿論あるものの、自分たちの日中の苦労がカタチになっていく過程が楽しいようで、どのグループも活動終了時刻まで編集作業に打ち込んでいた。ここまでの努力が一連の作品として見れたことで、完成させたいという想いがより強くなったことを感じた。

3日目 ～仕上げ・完成試写会～

朝食を終えると、どのグループも部屋の掃除を急いで済ませ、必死で編集作業に取り掛かる姿が印象的だった。午前中は、作品を3分間に収める戦いが続いた。それと並行して、「波の音」「セミの声」などの効果音をつけたり、回想シーンのアフレコをしたりと、作品をよくするために知恵を絞った。最後にタイトルとエンドロールを入れて、作品の時間を確認する…「3分間に収まった！」自然と拍手やハイタッチが起こる。子どもたちの顔に、想いをカタチにした達成感とプレッシャーから解放された安堵感が広がった。

午後からは、多くの保護者の方にお越しいただき、一緒に試写会を行った。子どもたちから苦労したところや見どころを紹介してもらい、それを踏まえて作品を鑑賞した。鑑賞後には、「こだわって撮影したことが分かった。」「同じテーマでも全然違った作品になっていて驚いた。」等の感想が寄せられた。最後に、講師の先生方から講評をいただき、「ゼロ」からモノを創る面白さや苦労、難しいテーマに協力して粘り強く取り組んだことなど、多くの体験から学びがあったことを褒めていただいた。会場全体が温かい雰囲気にも包まれ、事業を終えることができた。

9 参加者の声

- たった3分間の映画だったけど、創ってみると難しかったです。
- 撮影中に雨が降って、いろいろと大変でした。
- 映画は「こうやって創るんだな」と初めて知りました。編集など、いっぱい努力が必要なんだなと思いました。
- 編集するのがすごく大変でしたが、みんなで助け合いながら楽しくできました。
- 人と協力することが大切だと分かりました。絆を深められました。



10 所感

映画創りは、子どもたちにとって楽しくも過酷な挑戦である。2泊3日という限られた時間の中で、自分たちの想いを3分間にまとめる。その完成までの過程に正解はないが、自分たちの納得いく作品になるか否かは、そこまでに取ったコミュニケーションに大きく関係する。共に考え、時にぶつかり、それでも最後まで自分達でやり遂げることで、友達との絆がより強いものになる。本気のモノ創りを通して、努力や協力の大切さ、達成感を感じられる本事業の教育的意義を、子どもたちの笑顔に見た。

